

# 海員時事

千足耕一（東京海洋大学海洋政策文化学科・教授）

## 海での遠泳について思う

私は東京海洋大学海洋生命科学部を中心に教鞭をとっている教員ですが、毎年、海洋工学部の学生たちが、海で遠泳を行う授業を支援しています。遠泳は授業の一環として行われるもので、集中授業として3泊4日で千葉県南房総の富浦海岸で開催され、船員を目指す学部学科の学生が必須科目として履修しています。140名ほどの学生が泳力に応じたグループに分かれ、最終的には上級グループで約2時間、中級者では約90分、100分程度の遠泳を実施しています。7月中旬に実施される海での実習に先立ち、学生たちは、5

月頃からプールで浮き身、泳法（平泳ぎ）などの泳ぎの基本を学びます。当初は「呼吸がうまくできない」、「脚の使い方がうまくできない」など、泳ぎがままならなかった学生も、7月の集中授業最終日の遠泳では、なんとか課題を克服して目標を達成します。泳げる学生

でも、遠泳中に寒さから尿意を催し、支援艇につかまらなると排尿できないこともあります。また、様々に変化する水温や熱伝導が高い水の特性により体温が奪われ、震えを生じる学生もいます。早い沖出しの潮に乗ってなかなか岸に戻れず、予定時間をオーバーすることもあります。海や水とのつきあい方について身を持って学ぶ場となっています。

海上自衛隊においても幹部候補生学校において遠泳を行っています。ことが報告されています。その遠泳は海軍兵学校から続く伝統行事で、2016年には一般幹部候補生課程の候補生が8マイル（約15km）を約8時間半、一般幹部候補生課程（部内課程）の候補生が6マイル（約11km）を約7時間かけて力泳したと紹介されています。その海軍兵学校の遠泳の歴史（記録）を振り返りますと、1877年（明治10年）海軍兵学校の生徒50人が東京で

12kmくらいの距離の遠泳をしたという記録が残されています。

同年に学習院の生徒甲・乙の組50名が遠泳として、遠泳を実施したことが記録されています。このように遠泳が盛んになった大きなきっかけは、1894年から95年にかけて起こった日清戦争であり、海国日本というスローガンのもとで高等教育機関も海浜で水泳を行っていくようになったようです。



遠泳中の一コマ

学習院のほか、一高、東京帝国大学、高等師範学校の附属中学校、東京高等師範学校では、1890年代終わりから、1900年はじめにかけて遠泳を行いました。柔道の創始者とされる嘉納治五郎は水泳も非常に重視し、「四面環海の国に生まれたる日本男児が、巨浪洪波の間に其の生を完うすべき術を学ぶは、寧ろ国民として当然の務めたるべきをや(1894年・国士)」と述べていると紹介されています。彼の影響もあり、遠泳というものが教育の一つの手段として受け入れられていったと考えられています<sup>1)</sup>。

遠泳の現代的な価値について長谷川(2003)<sup>2)</sup>は、「自然環境での水遊び指導や自然体験のための遊泳技術指導、体験学習等が、自ら学び自ら考える力などの生きる力をはぐくむことに寄与できる効果的な野外教育の「方法である」と述べています。また、矢野(2014)<sup>3)</sup>は、遠泳実習について単純に水泳の指導により心身の鍛錬を行えばよいというものだけではなく、海や天候といった自然から学ぶとともに「自然」というものを理解しながら、また多くの友

人と励ましあい支えあう集団での「宿泊」を通した集団生活を営む中において、人間関係の輪を培う場でもあると述べています。

戦後においては、学校にプールが設置されて、自然水域で泳ぎを学習する機会が大幅に減少するとともに、自然水域における水質の悪化や安全面での課題、教師の負担増や指導力の低下なども相まって、臨海学校(遠泳実習)の実施率は減少しており、例えば、大阪市



遠泳を終えて迎えられる学生たち

下では約5%の実施状況(矢野2009)<sup>4)</sup>であったことが報告されています。遠泳の価値を訴える指導者が減っているということも指摘されています。

このような中、2019年5月10日付の南日本新聞(第27758号)に、鹿児島市の松原小学校、清水小学校が伝統の錦江湾横断(桜島から対岸の磯海岸までの約4.2km)遠泳に向けて、5月7日の放課後から練習を開始した記事を目にしました。松原小学校の遠泳は1926年(大正15年)に第1回が開催され、戦争などによる中断の後、2019年度は54回を迎えるとのこと。清水小学校の遠泳の歴史はさらに古く、1917年(大正6年)に第1回が行われた記録があります。しばらくの中断を経て、1982年に復活し、以後37回継続されています(2019年は通算65回目)。清水小学校の遠泳は、保護者や地域が一体となって取り組む地域主体の行事として、「水泳同好会」が主体となっており、「薩摩の郷中教育である」と紹介され、泳ぎ切った子供たちは達成感と自信に満ち溢れていると表現されています。小学校教員だけでな

く地域の人々やOBたちが子供たちに影響を与える素晴らしい事業です。毎年、4年生から6年生までの20%弱が参加しているそうで、児童数が減っていく中、伝統的な行事をいかに続けていくかが課題となっているそうです<sup>5)</sup>。

遠泳は危険を伴う活動ですが、様々な支援や準備、練習により、安全性を高めたうえで、学習者が挑戦する機会を創り出す素晴らしい活動です。海を直接的に感じ、海への理解を深めるためにも遠泳は非常に有効だと思います。今年も、様々な場所で実施される遠泳が安全であり、また、途絶えることのないことを祈っています。

千足耕一 プロフィール

1966年4月神戸市生まれ。現職  
 東京海洋大学海洋政策文化学科・教授(博士・医学)東邦大学。専門  
 分野 海洋スポーツ・レクリエーション。著書に「水辺の野外教育」(杏林書院)や「スキューバダイビング・セーフティ」(成山堂)ほか。海洋での身体活動に関する研究活動と教育活動を実施している。

## 文献

- 1) 真田久「日本における遠泳の歴史と展開」『海洋人間学雑誌』第7巻特別号：22-26，2019.
- 2) 長谷川勝俊「游泳と水上安全に関する研究Ⅲ」『野外教育研究』第6巻第2号：35-44，2003.
- 3) 矢野正「臨海学校における遠泳教育の意義」『海洋人間学雑誌』第2巻特別号：34-36，2014.
- 4) 矢野正・三村寛一「小学校における安全な臨海学舎の実践研究(Ⅳ) - 臨海学校における実態調査 -」『大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門：教科教育』57(2)，103-113，2009.
- 5) 田平孝行・上村宏明「遠泳を通じた地域との繋がり、その歴史と今後の展望」『海洋人間学雑誌』第7巻特別号：27-32，2019.

